

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 17 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520806

研究課題名(和文) 上海のユダヤ人難民社会における生活再建に関する研究

研究課題名(英文) Research on the life rebuilding of Jewish refugees in Shanghai

研究代表者

阿部 吉雄 (Abe, Yoshio)

九州大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：70231975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：第2次世界大戦を含む1938年～1951年の10年余りの間、中国の上海に中欧・東欧系ユダヤ人難民のコミュニティが存在した。彼らはナチスドイツの迫害やドイツ軍の侵攻に追われ、当時入国ビザが不要だった上海租界に逃れた約1万7000人のユダヤ人だった。本研究では気候、言語、文化、習慣、社会制度などが故郷のヨーロッパと大きく異なる上海において、ユダヤ人難民たちがコミュニティとして生活再建に取り組んだ活動を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：From 1938 to 1951 for more than ten years that include World War II existed in Shanghai in China a community of Jewish refugees from Central Europe and East Europe. They were about 17,000 Jews, who escaped the persecution by Nazi Germany against Jews or the invasion of the German armies and took refuge in Shanghai Settlement that did not demand for any entry visas in those days. Jewish refugees struggled to rebuild their life in Shanghai where climate, language, culture, custom and social system are quite different from their homes in Europe. This Research clarifies their activities as community.

研究分野：難民支援

キーワード：上海 ユダヤ人 難民 生活再建

1. 研究開始当初の背景

(1) 第2次世界大戦を含む約13年間(1938年～1951年)中国上海に中欧系・東欧系ユダヤ人の難民社会が存在した。彼らは1938年3月のナチスドイツによるオーストリア併合から1941年6月の独ソ戦開始に至る時期に、ナチスによる迫害やドイツ軍の侵攻に追われ、当時入国ビザが不要だった上海租界に逃れた約1万7000人のユダヤ人である。

彼らの多くは当時日本軍が管理していた蘇州河以北の虹口・楊樹浦地区に居住した。1937年8月～10月の第2次上海事変で被害を受けたこの地区は家賃が安かったからである。1943年2月の日本軍の布告により、同年5月以降市内の他の地区に住むユダヤ人難民も虹口・楊樹浦地区の中の約2km²の「指定区域」(いわゆる「上海ユダヤ人ゲットー」)に居住・就労を制限され、終戦までそこに留まった。

(2) 上海のユダヤ人難民社会に関する研究は1960年代のHerman Dickerによる紹介から始まり、1970年代のDavid Kranzlerの多面的な記述によりその基礎が構築された。上海移住から50年が過ぎた1990年以降Ernest Heppnerを始めとするかつての難民のメモワールやインタビュー集が出版されるようになり、1990年代半ばからはそれらのメモワールを参照した研究もMarcia RistanoやJames Rossらにより開始された。2000年頃からはアメリカやドイツに保存されている公文書の発掘とそれに基づく実証的な研究がAstrid FreyeisenやChristiane Hossらによって始められた。2005年に発表された丸山直起の『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』は、上海にユダヤ人難民社会が生まれるに至った政治状況を解明する優れた国際関係史的研究である。

2. 研究の目的

(1) 本研究代表者(阿部吉雄)は上海のユダヤ人難民社会について、その実態を解明すべく多方面の資料を用いて研究を行っている。ユダヤ人難民たちは戦時下の上海における劣悪な環境の中を生き抜かねばならなかったが、その過程で中国人との共生と異文化理解、西欧キリスト教社会に同化していた自らのアイデンティティの再構築、民主的選挙に基づく自治、共同体における連帯意識の強化、失業者への職業訓練や起業支援、伝統的な家父長制社会から男女共同参画社会への移行などを経験した。その研究を通して今日世界中で頻発する紛争や災害による難民問題、さらには現代社会全般を考察する上で有用な視座が得られるものと考えられる。

(2) 本研究の目的はまた、上海のユダヤ人

難民社会が行った危機的状況の克服への努力を「生活再建」の観点から分析し、現代の難民問題を解決するための知見を得ることにある。難民問題の解決における重要な課題は、命の危機を逃れた難民の長期的な生活再建を行うことである。その場合は外部からの難民個人への支援だけでなく、難民たち自身によるコミュニティの創造、共通の目標意識や相互扶助の確立が必要となる。本研究は上海のユダヤ人難民社会という具体例の分析を通して、難民問題の普遍的理解と難民が置かれる困難な状況の解決方法の発見を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は上述の先行研究を踏まえつつ、最近見つかった各種資料(難民が発行した新聞、各種名簿、メモワール等)やこれまで利用されなかった日本や中国の公文書から得られる様々なデータを有機的に組み合わせ、上海のユダヤ人難民社会が自らの持続可能性を目指して、いかなる現状認識や将来の予測に基づき共同体としてどのような施策を講じ、また個人が行動したかを明らかにしようとするものである。

4. 研究成果

(1) 2012年度は、難民が発行した新聞に掲載された「週刊医学ニュース」と、上海のユダヤ人難民社会の自治組織として成立したユダヤ教区が発行した『教区新聞』の記事を取り上げた。

上海の夏は摂氏40度近くになり、湿度も高い。これに貧弱な衛生条件が重なり、ユダヤ人難民たちが故国で経験したことの無い赤痢、腸チフス、マラリアなどが次々に流行した。寒い湿った冬もインフルエンザや呼吸器系の疾病をもたらした。上海のユダヤ人難民の中には200人以上の医師、180人の歯科医、120人の看護師がいた。これらの医師や看護師が上海在住ユダヤ人による支援委員会やユダヤ教区と協力し、脆弱な状態にある難民社会が直面する健康上の様々な危機に対応した。ユダヤ人難民が発行した新聞の1つの『上海ユダヤ新聞』(Shanghai Jewish Chronicle)では、1941年半ばから1942年後半にかけて「週刊医学ニュース」(Medizinische Wochenschau / Medical Weekly Review)という記事が定期的に掲載された。「チフスとパラチフスについて知っておくべきこと」、「熱帯病について」、「気候に関する考察」、「上海での皮膚病について」、「医学の世界から。誰でも知っておく価値があるもの。熱帯の気候における神経障害/アモク(急性精神錯乱)とは何か/個人心理学とは何か」、「妊娠中絶と中国の法律」、「一酸

化炭素中毒への注意」、「結核の予防」、「壊血病」、「アメーバ赤痢」、「マラリア」、「医学にける蛇と蛇の毒」、「回虫」等のテーマについて医師たちが紹介している。記事の中の記述から、熱帯病に関する難民たちの無知や油断が、難民社会全体に病気を広めることへの医師たちの危機感が大きかったことがうかがえる。

上海への移住当初、中欧系ユダヤ人難民たちは上海在住のセファルディ系ユダヤ人社会やロシア系ユダヤ人社会のシナゴークでの礼拝に参加していた。しかし礼拝における言語や様式の違いもあり、難民たちはまもなく独自の礼拝を希望するようになる。試行的に行われた難民たちだけによるドイツ式の礼拝が成功した結果を受けて、上海在住の両ユダヤ人社会による支援組織「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」(Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA)下の組織として1939年7月に「ユダヤの宗教的共同体」(die Jüdische Kultusgemeinde)(以下、「上海ユダヤ教区」、「ユダヤ教区」、「教区」)が誕生する。そして11月には上海ユダヤ教区はCFAから独立する。発足はしたものの、まだCFAから独立はしていない9月に、上海ユダヤ教区は週刊で『ユダヤの宗教的共同体教区新聞』(das Gemeindeblatt der Jüdischen Kultusgemeinde)(以下、『教区新聞』)の発行を始める。これはユダヤ暦の新年(5700年Tischri月1日)に合わせたものだった。その1939年に発行された版の記事を通して、発足当初のユダヤ教区執行部の人的構成、ユダヤ人難民社会における教区設立に対する様々な意見、上海在住の両ユダヤ人社会との関係、いまだドイツに残るユダヤ人たちへの想い、発足当初の教区の課題と活動などを知ることができる。特にユダヤ教(聖書)とユダヤ文化に関する記事が目立ち、ユダヤ教徒・ユダヤ人として集団のアイデンティティを確立しようとする意図が見られる。また、ユダヤ人難民ジャーナリストによる他の新聞と違い、『教区新聞』はヨーロッパの戦況や国際政治に関するニュースは扱わず、上海での出来事の報道もユダヤ教区に関係するものに限られていた。

(2)2013年度は2012年度に引き続き、1939年に発行された『教区新聞』を扱った。ユダヤ教区の会員に無料配布され、広告収入を原資として発行された『教区新聞』に掲載された広告の分析を通して、当時のユダヤ人難民社会の生活再建を目指して行われた経済活動の特徴を確認した。広告の件数および広告文1件あたりの行数、新規の広告の件数は9月の創刊以降穏やかに増加するが、冬には減少した。このことから、ヨーロッパとは異なる上海の経済環境の中で起業できる能力と資力を持つ難民は、1939年の秋の時点でほとんど開業し終えていたこと；ヨーロッパ出身

のユダヤ人難民たちにおいては、独自の礼拝を行うユダヤ教区の設置への初期の興奮から醒めるに伴い、『教区新聞』の広告効果への期待も落ち着いたこと；週刊の『教区新聞』の広告効果は、広告主の業種によっては日刊新聞に劣っていたことなどが推測される。広告主の所在地で見ると、蘇州河以北の共同租界(難民の約半数が居住した虹口・楊樹浦地区)が66.2%、蘇州河以南の共同租界が15.9%、フランス租界が15.9%、租界西側の越界路区が0.6%、不明が1.5%だが、後になるほど、そして新規の広告(開業)は虹口・楊樹浦地区の割合が増える。1937年の第2次上海事変における戦闘の被害を受け、家賃が安かった虹口・楊樹浦地区にユダヤ人難民が集中していたのに対し、資産的に恵まれた難民たちの多くは蘇州河以南の共同租界やフランス租界に住みついていたため、起業する条件に恵まれた彼らの広告がその分多くなるはずなのに、実際には比較的少なかった。おそらく、蘇州河以南の共同租界やフランス租界の難民たちは租界の外国人社会への参入を目指し、一方虹口・楊樹浦地区の人々はユダヤ人難民のコミュニティの中で生計を立てる道を選んで『教区新聞』に広告を出したと考えられる。業種によっては場所の偏在があり、医師や貴重品の買取り業者の住所は蘇州河以南の共同租界やフランス租界であることが珍しくない。また食品関係では日々の飲食は虹口・楊樹浦地区、食品製造はフランス租界という傾向も見られる。業種別では、医療関係(18.9%)、食品関係(18.6%)、貴重品買取り(12.2%)の3分野が最も多く、当時の上海ユダヤ人難民社会の状況を反映している。すなわち、いずれの分野でも難民社会の内部における需要が現れているだけでなく、ユダヤ人難民たちが上海租界と接点を持ち、租界の経済活動や社会体制に組み込まれ、また租界の状況にさまざまな影響を与え始めていたのである。

(3)2014年度は、上海のユダヤ人難民社会における医療活動と青少年支援という2つのテーマに取り組んだ。

研究代表者は上海市档案馆に保管されている「欧州猶太人難民総合性材料 日本当局管理状況等。1939~1940年」という資料の中に、「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」の医療委員会が上海共同租界工部局の公衆衛生局長に提出した、英語で書かれた報告書を発見した。この報告書には、医療委員会が管理運営したユダヤ人難民専用の移住者病院、隔離病院、夏季疾病用病院、産科病棟、中央薬局、最も貧しい難民用に数ヶ所設置した収容施設「ハイム」に置いた外来診療部門の活動状況、医療委員会と上海の既存の病院との連携、医療委員会による学校衛生事業、社会福祉事業が詳細に紹介されている。医療委員会の報告書にはユダヤ人難民の医師57名、歯科医5名、歯科療法士1名、薬

剤師 2 名、看護師 1 名の氏名が記載されている。医療委員会の活動により、最も脆弱な上海移住 1 年目の難民社会の死亡率は、人口 1000 人あたり 8.2 と非常に低く抑えられた。上海への移住により学業が中断された 15 歳以下の子どもたちのために「上海ユダヤ人青少年協会学校」(Shanghai Jewish Youth Association School) が設立された。しかし就学年齢を過ぎた 10 代後半から 20 代前半の若者たちは単身で上海へ移住した者も多く、社会的に孤立し、コミュニティにとって失われた世代になろうとしていた。1939 年 7 月の発足当初からこの問題を憂慮していた上海ユダヤ教区は、福祉部門が青少年局を設立し、「一般シオニスト機構」(Allgemeine Zionistische Organisation / A.Z.O.)、19 世紀のロシアで誕生したユダヤ人職業訓練組織「手仕事と農業のための協会」(Obschestvo Remeslenovo i zemledelcheskovo Trouda / ORT)、難民の中の手工業者たちの協力を得て、若者たちへの卒後教育、職業訓練、就職支援を行った。職業訓練施設では錠前屋、大工、電気技術者、製本、ファッションデザイン、造園・園芸、仕立屋、美容師、菓子屋、革職人、毛皮職人、ラジオ修理工、金細工師、歯科技工士など 21 のクラスで 6 ヶ月間無料の訓練が行われた。日本軍の布告により 1943 年 5 月以降すべてのユダヤ人難民は虹口・楊樹浦地区の中の約 2 km²の「指定区域」(いわゆる「上海ユダヤ人ゲットー」)に居住・就業が制限された。この地区を管理する提籃橋分局特高股が 1944 年 8 月に作成した『外人名簿』によれば、10 代後半のユダヤ人難民の半数以上が「見習い」を経て就職しており、難民社会の取り組みが成果を上げていたことが分かる。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民社会による青少年支援、言語科学、査読無、50 号、2015、65-76

阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民支援組織の医療委員会の報告書、言語文化論究、査読無、33 号、2014、107-116

阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の広告から (1939 年)(下) 言語科学、査読無、49 号、2014、79-90

阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の広告から (1939 年)(上) 言語文化論究、査読無、32 号、2014、61-69

阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から (1939 年)(下) 言語文化論究、査読無、31 号、2013、77-87

阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から (1939 年)(上)

言語科学、査読無、48 号、2013、49-61

阿部吉雄、『Shanghai Jewish Chronicle』の「週間医学ニュース」、言語文化論究、査読無、29 号、2012、181-189

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 吉雄 (ABE YOSHIO)

九州大学・大学院言語文化研究院・教授

研究者番号：70231975